



TITLE:

<Book Review>Hydrology Section,
Survey Division, Royal Thai
Irrigation Department, Hydrology
and Water Studies of the
LAMTAKONG, Bangkok, 1962

AUTHOR(S):

南, 勲

CITATION:

南, 勲. <Book Review>Hydrology Section, Survey Division, Royal Thai Irrigation Department, Hydrology and Water Studies of the LAMTAKONG, Bangkok, 1962. 東南アジア研究 1966, 3(5): 173-173

ISSUE DATE:

1966-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55162>

RIGHT:

ワーを要求している。産業構造からいっても、中等・高等・初等教育の順に拡充が必要だとする。そのために障害となるのは、アジアに伝統的な進学と進級・卒業のためのきびしい試験制度だとして、選別制度とカリキュラムの改善の必要を述べている。

第4章では、女子教育、教員問題、海外留学の問題をとり上げている。第1の問題では、アジア特有の問題である教育上における男女の差別の原因は、社会階層の分裂にあるとしている。高等教育への女子の進出は必ずしも低くはないが、それは上流階級の女子に限られている。一般女子の就学率の低さは宗教の影響にもよる。アジアの教育は経済的・社会的・文化的要因を抜きにして考えられない。アジアの教育によって、教員養成の拡充ほど緊急な課題はない。人材養成を海外に依存することも問題であるが、アメリカの影響力の増大は無視できないとしている。（高木太郎）

Hydrology Section, Survey Division, Royal Thai Irrigation Department : *Hydrology and Water Studies of the LAMTAKONG*. Bangkok, 1962.

LAMTAKONG Project は、バンコックから約 100 km の地点で、コラート寄りに存在する灌漑と洪水調節を対象とした水利計画である。この地方の流出量は各年により非常に変動が大で、143~239 mil. cu. m と変化し、年間流出量の 90% は雨期に流出している。灌漑を行なうためには、どうしても年間流量の調節を行なう必要がある。全灌漑受益面積は 238,000 rai (6.5rai = 1 ha)、灌漑に必要な最大用水量は 18c. m. s で 8 月に生じる。この年間の流量調節のために、有効貯水量 220 mil. cu. m が必要である。したがって洪水調節に対しては、その全流出量が貯水されることとなり、洪水時余水として放流するものは大した量とはならない。

貯水池内の堆砂量については、20 mil. cu. m を 100 年間に見込んでいる。

したがって総貯水量は 240 mil. cu. m となる。余水吐の設計に対しては、流入計画洪水量は最大確率洪水として 1,500 c. m. s を考え、余水吐巾は 40 m とし、計画流出余水吐量は 625 c. m. s となっている。この洪水越流のための余裕水深は 4.20 m とし、結局 2 m の free-board を考えて、ダム堤頂標高は +281.00m

となる。なお、灌漑期の取水能力は 20 c. m. s である。

本計画書は、Royal Irrigation Department によって作成されたもので、モンsoon地帯の水利計画の考え方に対して、一つの有用な資料と思われる。なお、筆者らは、本 Project の水文資料について今後継続研究していく予定であり、ここに紹介した。

本計画書は1962年に完成しているが、現在漸く、事業の実施が始まったところである。（南 勲）

J. Marvin Brown : *From Ancient Thai to Modern Dialects*. Social Science Association Press of Thailand, Bangkok, 1965, ix+180 p.

タイ系諸言語の比較言語学的研究はかなり古くから行われており、その文献もチベット・ビルマ系の言語に関するものより多いであろう。本書は、それらのうちで最も新しいものと言ってよいだろう。「新しい」と言うのは、ただ時間的に新しいと言うだけではなく、そこに用いられている方法論に関しても言えることであって、これが最も重要な点である。すなわち、東南アジアの言語に関する将来の比較研究と言うのは、同系統ではなかろうかと思われる言語から単語をひろい集めて、似た様な形のものをつき合わせるに過ぎないという傾向が、多少ともあった。これに対して、本書では、ただ似た単語のつき合わせと言うのではなく、整然とした理論に基づいていると言える。本書が1962年に Cornell 大学に提出された doctoral dissertation である点から現在のアメリカにおける東南アジアの言語の比較研究の動向あるいは水準をある程度しめすものと見てよいだろう。

著者は、1953年に初めてタイ国に来て以来のべ10年間を現地ですごしており、現在はバンコックにある American University Alumni の Staff Linguists の 1 人である。単にこの地域の言語を取りあげて研究すると言うだけではなく、一般的な言語理論をも研究しており、自分の展開した理論を具体的な言語の研究に応用していると言える。しかし、今までに発表した論文・書物の類は、本書以外にはほとんどなく、私の知る限りでは、University of Fine Arts の Journal に発表された論文が 1 つあるだけである。この論文は、現在バンコック平野を中心として話されているタイ国中部方言は、Ram Khamhaeng 王碑文に代表される